

167
147

冠
附
獨
案
內

087720-000-6

特30-445

冠吟獨案内

現金亭 正札/編

M26

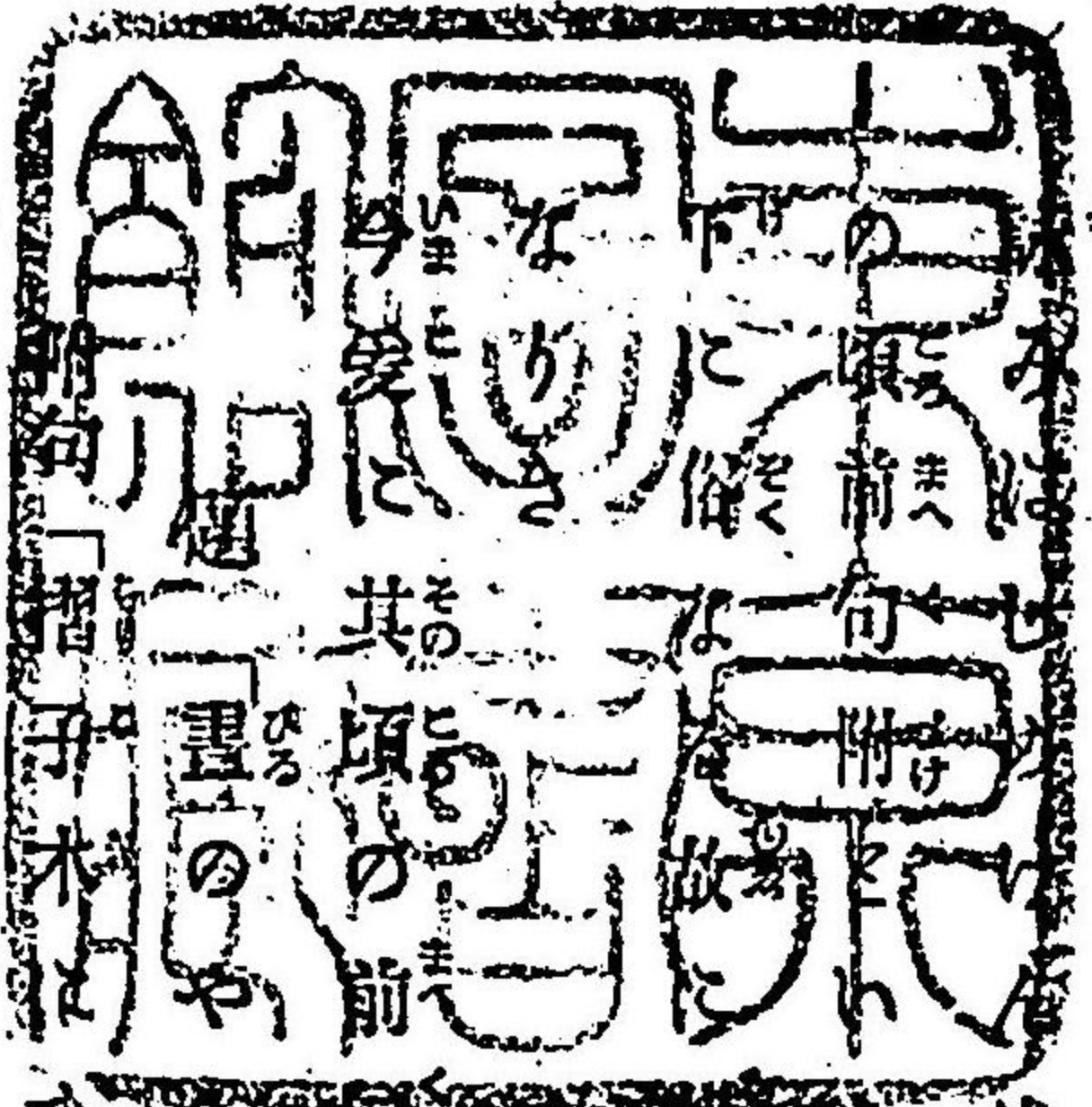
DBF-0033



千時明治癸巳二十六春

達 广 葦 野 史

緒 言



○當時都鄙に流行する冠附てふものはいつの頃より
さだかならねども按ずるに元祿寶永
ふものあり元俳諧より出て句の詞無
却て入り安しとて世に行なはれ盛ん

附を左に掲げて知らしむ

斯の如く附けて「摺子木にまた角のある世帯にて」 矩久

やうなる扱も燈し火「下新世帯の人に儉約を守れと教

訓したる一句とはなりぬ今此句の題と句を冠附にか
りて附る時は

題「晝のやうなる扱も燈し火」

冠附にては「榑木に角がまだあるに」

右の如く文字の敷ころ違へども心は同じ事なりた
題を後にすると先に立るとの轉語より前句附の附方
を以て冠附を發明せし事疑ひなし夫より前句は次第
に裏へ冠附は彌々盛んとなりたり寶永の末の頃は兩
句合併して好者の催しありたれども前句は三步冠附
が七步なり余が藏書の中に「神子の膺」下云ふ冊子あり
寶永七年十月の板行にして今より百八十四年の昔し

なり該書を閲するに初頂に前句附少々あり其次に是
より「かさ附かる口もんさく付云々」下記されたり句調
は文化文政の頃と粗同体なりこれを以て是を思ふに
冠吟は滑稽輕口にして句調は齒にさわらぬやうであつ
さりとして心の野鼻を放れ面白味あるを佳とす又も
んさく付とは則文作也素より冠吟は文章の一部分に
して文才無くては僅々二六の文字を以て仁義禮智忠
信孝貞の實情を穿つ事能はず冠吟者は文章の藝術家
と云ふも敢て誤言には非ず爰に我師應亭の門友なる
正札大人これ浪速宗匠達の撰び玉ひたる玉吟を蒐
めて書林矢島誠進堂の主人とはかり明治作例冠吟獨

案内と題し粹にして世に弘めんとす幸ひなる哉此道
 を好める初心の人のわけ入る山の標石にことならず
 諸宗匠の取方を知るには此書の外に有る事いまだ耳
 にせず實に獨案内の題号に空しからず
 明治二十と六としたしか己の春

浪速のみなみ粹を通りぬけ
 野暮なる避村に閑居する

花樹軒芳若

志る

冠附獨案内

明例治冠吟獨案内

風律齋芦笛撰

現金亭正札編

齒切嚙(秀逸) 兄貴代理に私ニ往コカ 百中
 早業(第二) 今朝の戸張をチャント子に 米水
 掃出して(第三) 樂に寐られた粉を椽へ 晒落テル
 裸日百貫 破れた革盤に卒業證が 竹
 晴日和 宿屋も今朝はひつろりと 正札
 兀ゲ山 颯音も低ひ谷川の 古木
 曠が問敷 電氣引カすと店番も 一都
 齒に絹着せ 自治熱心の演説で 正札

冠 附 獨 案 内

曠^レが間敷
半狂半亂^(拾軸)
耻^マ捨て^(大尾)

四海浪静丸撰

ヤケ松来て見りや椅子客で
立^聞く涙^だ張^はる乳^ちに
掛^クん間^あだ^と迷^い感^めを

よし若
イ
扇
口

眼^めの前^{まへ}に^(秀逸)
道^{みち}化^け交^まり^(第二)
味^{あじ}ひ事^{こと}^(第三)
くらがり
車^{くるま}ポト^ト
希^{まれ}に應^{こた}じ
難^{なん}癖^{くせ}のふ
柔^な和^わ

祭^{まつ}ると樂^{たの}に悦^よこんで
苦^くは噓^うのよな旦那^{だんな}ハンの
林^{はやし}爛^{らん}の酒^{さけ}よふ出来^きた
勉^{めん}強^{きやう}心^{こころ}から打^う水^{みづ}も
朝^{あさ}は人^{ひと}形^{かたち}の衣^い裳^{しよ}から
白^{しろ}扇^{せん}へ米^{こめ}乗^のて遣^やる
柿^{かき}より栗^{くり}の安^{やす}ひ秋^{あき}
戸^と前^{まへ}殖^殖した原^{はら}因^いは
秋^{あき}

竹
玄
辰
東
吞
香
ラ
竹
東
山
山
山

冠 附 獨 案 内

道^{みち}化^け交^まり
田^たは充^{じゆう}分^{ぶん}^(拾軸)
立^たち止^とり^(大尾)

陰陽軒和合撰

嬢^{ぢやう}裂^れろふな舞^{まい}もふて
山^{やま}際^{さい}船^{ふね}が通^とひろな
持^もつて遣^やれん景^{けい}に惚^ぼして

柴
信
角
夫

命^{いのち}の山^(第二)
寶^{たから}の山^(第三)
届^{とど}く注^{ちゆう}意^い
俱^くに
痒^{かゆ}所^{ところ}へ手^て
静^{しず}か
ソキ^{ソキ}お揃^{そろ}

嫌^{きら}らい晝^{ひる}寐^ねの二^にの腕^{うで}へ
種^{たね}日^ひにやこすむ玄^{げん}關^{かん}迄^{まで}
橋^{はし}にも道^{みち}の隔^{へだ}して
小^こ姑^{ぢよ}メは肩^{かた}嫁^{よめ}は足^{あし}
余^{あま}る普^ふ請^{しん}で寄^よ附^ぶ金^{かね}の
違^{ちが}て花^{はな}見^みの雅^{みや}客^{きやく}とは
献^{けん}立^た見^みても味^{あじ}ろふな
姉^{あね}ハ^ハウ^ウト言^いひでへな

よし若
祐
花
逢
初
夢
祐
山
山
人

冠 附 獨 案 內

悔^{ひつ}り
堪納^{たしのう}して^(拾軸)
退^{たい}屈^(大尾)

梅の家春睦撰

天窓^{あま}打合^{うちあ}ふて夜^よ這^い同^{どう}士^し
まだ静岡^{しずおか}かステ^スー^ティ^ィヨ^ヨハ
しやべり供^{こも}して虫^{むし}開^{ひら}の

四

春 ッ ュ
ル キ

明^{あきら}カ^(秀逸)
抽^{ひき}出^だて^(第二)
別^{わか}レ^惜み^(第三)
腰^{こし}掛^かて
在所^{ざいしょ}氣^き樂^{らく}
現^{げん}金^{きん}
無^む學^{がく}文^{ぶん}盲^{もう}
十^{じゅう}日^{にち}菊^{きく}

惜^{おぼ}まる、身^みの功^{こう}蹟^{せき}は
乳^ち細^こさの兒^こに宿^{やど}の妻^{つま}
焚^たて呉^{くれ}なと仇^{あだ}に香^かを
世^よ話^わしふ箸^{しやく}を濡^ぬ間^まも
賑^{にぎ}やかに彈^ひエ、でへな
扇^{あふぎ}忘^{わす}れて立^たち菊^{きく}見^みな
否^{いな}がる縁^{ゆかり}を片^{かた}意^い地^ぢに
派^は手^ては我^{われ}にも着^き各^ごて

湖 辰 己 月
松 ナ 辰 己 月
江 ニ 己 月
春 タ 松 江
辰 ト 春 己 月

冠 附 獨 案 內

豫^よ防^{ぼう}して
浮^{うき}世^よは夢^{ゆめ}^(拾軸)
停^{とど}カ^(大尾)

覺^{おぼ}悟^とは極^{きま}ず戀^{こひ}の情^{じやう}も
珠^{たま}數^{かず}も笑^{わら}ん若^{わか}ひ手^ての
友^{とも}は寐^ねた松^{まつ}起^たち松^{まつ}

染 仙 辰 己 人

富貴館長命撰

笑^{わら}ひ聲^(秀逸)
石^{いし}と豆^{まめ}腐^(第二)
人^{ひと}德^(第三)
朝^{あさ}晩^{ばん}迄^{まで}
高^{たか}ひ
笑^{わら}ひ聲^(秀逸)
力^{ちから}キ入^いれて
間^まに合^あぬ

何^{なに}國^{くに}も君^{きみ}ケ代^よの德^{とく}で
内^{うち}の眞^{まこと}身^みに競^{くら}べたら
愛^{あい}ひの手^てへ乗^のる渡^{わた}り獲^とる
薄^{うす}ひ資^し本^{ほん}の運^{うん}轉^{てん}に
惜^{おぼ}しいな適^{あた}の落^{おち}武者^{むしや}が
翫^たで祝^{いわ}ふてどの村^{むら}も
議^ぎ論^{ろん}も國^{くに}を思^{おも}ふ情^{じやう}に
前^{まへ}車^{くるま}見^みて、は今^{いま}の世^よに

五

東 山 芦 春 里 魁 月 南 京
長 山 長 山 十

冠 附 獨 案 內

見た事なし
高ひく (拾軸)
サモ似たり (大尾)

尻は音の仕る物じや
覺めて其蔭見返と
古歌にも雪と卯の花を

柴
みどり
月

旭居鶴翁撰

肌身放さず (秀逸)
臨時の用 (第二)
積上ッて (第三)
地の徳
矢の如シ
積上ッて
野は盛
由來長く

讀んだ書物は賣た
蛭指夜中に起されて
所得札張る煙燧屋
かわしましやころ遠路から
火鉢の傍で縫ふ裕衣
土産が買える満期には
一層注意踏切に
殿指さして先達が

百
中
正
一
松
万
松
山
貫
丸
指
輪
シ

冠 附 獨 案 內

臨時の用
強ひく (拾軸)
昔しを今 (大尾)

豆屋 禪シ 締るのか
梅檀の芽に蔭の地も
杖買ふた地も馬車道に

魁
山
石

浅茅葦羅山撰

日く (秀逸)
神力 (第二)
一心に (第三)
樂じや
くるくも
後の爲
懸直なし
日く

宿も近なる又六の
かへつて風が虫拂て
侗が覺へたチヨコ節
作りおふせて刈おふせ
さゝる、指もさす指も
煤人斗りに任されん
百圓でへな小指なら
湯盤の銘垣根には

よし若
山石
寶樂
満月
吟松
山石
佛
満月

冠 附 獨 案 內

ヤケに成
うなづいて (拾軸)
輝 (大尾)

管 弦 齋 素 閣 撰

世は豊 (秀逸)
塵打拂 (第二)
果しが無ひ (第三)
利益を計り
能程よい
齒喰しばり
調子はづし
いらくど
煩悩と中能かつては
泣かず轉ても孤子は
損も儲も無ひ不意の
現品名高さを國華
保護有る歟で移住地は
外から見へぬ苦が有て
人の笑ひに成る美服
烟艸の煙り置て立

米外
満月
新玉

竹
松山
全
三雀
半
竹
半
魁月

冠 附 獨 案 內

了簡違ひ
玉に疵 (拾軸)
元へ返り (大尾)

木 火 土 金 水 撰

益々榮 (秀逸)
堅ひ (第二)
叶わん (第三)
先けふも
最中
吐息つき
景色見て
年の功
升遣ふのを仕る自慢
律氣から出る青筋が
冬至梅からさす影も
遣わる、身も氣勇が
下女も剛ろに下宿屋の
儲憎ふて出安ふて
定まつた壽の内入が
餅も消化で喰高の
積つて雪と宿賃が
商業學にも無ひコキウ
氣にも大事を活潑が

盃
辰己
全

竹
松山
日の丸
芳若
竹
八木
殘月
卯ノ日

冠 附 獨 案 内

四の五のなし
甘と辛(拾軸)
腕(大尾)

蕉風窓双鶴撰

菓子物貫ひ九ツ一で
撥の有る細君で
基礎は合衆の獨立は
半正残
月札月

ぼとく(秀逸)
ほつたら(第二)
佛も地獄(第三)
骨折損
反古張襖(大尾)
外に有
はんのりと
細目に明々

麿の風情譽てたら
雲の灯花も禪寺は
かろわれてよる起たら
去年の咄し來た乳母が
折くが廊から
運は天かと思てたら
妹に問ふて親の日を
水鶏と思ひながらにも
カナル
芦長
流水
⊕
の辰己
紅山
東山

冠 附 獨 案 内

無様が無ひ
はつと吐息(拾軸)
反古張襖(大尾)

桃宴齋回水撰

馬仕とるケド友達が
詰まつて杖の長刺竿も
氣さんと丈を果と思て
辻春木
一三

難くせ(秀逸)
繕ふて(第二)
取て捨(第三)
元は一ツ
きつしりと
味ひ事
きつしりと
車ボトく

二ツの天窓二ツ張り
兒の成長を待つ障子
武を殺生せぬ順禮
町も賑ふ野が能りや
和布を焚日の夜は詠歌
目に成ったとは八目で
一切價辨當ずし
裾が汚る朝の萩し
全一八三
滴三木雀木

冠 附 獨 案 內

眼の前に
希ひに應じ(拾軸)
くらがり(大尾)

またいやしぼと呵る醫者
庵寺拾す後家の親
隧道越したかて盲

大九
よし若
玄々

遊々房回賀撰

延欠氣(秀逸)
ポイント飛(第二)
織カ(第三)
わづか
ポイント飛
一物有
延欠氣
人目恥じ

小僧がお経さし上て
普請奉行に州履取
残った旅費は梅川の
笹は色紙も裏家の
取戻したら羽衣を
寄る工合では若中の
呉んか何ぞ何所から
正札を見て直を問ふも

桂一戀臺戀臺角龜
聲光光光遊

冠 附 獨 案 內

延欠氣(拾軸)
長々御書(大尾)
代理

一人仕て釣蚊帳の内
肩に無頼中風病
報じる衣は主の仇を

華眺茶春居撰

さしかゝる(秀逸)
ふくれてる(第二)
ハイ(第三)
初
困
あらう
ならん
ハイ

藤篋へ繪がじりくど
持て来た鞍で桃番が
うせかけて升酒買
昨日と替る風の名も
笹流一夜は網打も
葎一重さへ絶かねて
居間も霞寝か呼鈴が
蓮中は凡夫御庵主も

浦島村山人木
八木
此松山
辰己山
浦島

冠 附 獨 案 内

因 音なし (拾軸)
ふくれてる (大尾)

侗が一日不食して
一銭が落ちてる様先
二輪はど入朔に

十四

村八割 竹木

清風堂里棋撰

力キ一ばい (秀逸)
元入レ (第二)
縦 (第三)
のがれてる
来たぞ (大尾)
やの字と
せわしない
やの字と
輕しと謂で雪の句を
尿 迄 買ふて 鶯の
此 黄な所が日本か
ゑらい 萩見じや有つたらな
今年も秋が夢の間に
余計 呉れたケド小便屋が
時計 欺して取リテエな
摺鉢もせにや雨乞を

竹正澤九竹月可四
八〇 海一

冠 附 獨 案 内

自はじきして
力キ一ばい (拾軸)
き (大尾)

ばやかかれてよる寫眞屋で
處分いかいと國會の
音も厭ふて摺墨の

九半四 八月海

春窓亭喜史撰

野は盛り (秀逸)
論なし (第二)
他力と自力 (第三)
野は盛り
強ひ
吉凶し
低ひ
とりく 磨

中く 仕業さしよらぬ
兒が喰て仕舞て焼餅を
よふ 透筈ヨヤ 搦樽が
鏡預かつた人も留主
世取りは飾る人形さへ
新し聞とると職人に
嫁はお留主に駒かけて
五木場の鶴長家から

中松山 青柳山 魁山石 山 二九九 松山

十五

梅の香り
昔しを今(拾軸)
吉凶し(大尾)

白貫堂鷹丸撰

急持余し(第二)
一理一害(第三)
天道人を
風前の燈
惜しいく
手の舞足
時世に随

離盃する問もない知己へ
教師が説諭親呼で
宿屋鐵道の株買ふて
地理も委ふ日本語で
説す理に身も震わして
透りや名譽も得る身マヤに
仲居踏やら小資を
椅子の手當も株守が

十六
一松指
貫山輪

東梅月指松辰辰月辰
々々輪己己

急軒に注連繩(拾軸)
風前の燈(大尾)

松諷亭琴史撰

濁なし(秀逸)
來た(第二)
賑ふ夏(第三)
のほんじや
存じもよらぬ
濁りなし
煙の如し
天氣伺ひ

別莊も掃除ちらくで
常はふ沙汰な人も來て
廢娼説から遊廓は

正一八
札光木

茶店は脇へ繪馬堂の
幼兒橋結へ往いでも
さし止もなし食物に
遊でるのに稼がして
往くなり茶漬ドウドスと
剛ひ時出る念佛は
解る氷りは器から
伐出しや流す支度して

の竹正ム翠一全山
十札メ甫貫樂

冠 附 獨 案 內

禮はいらぬ
濁りなし (拾軸)
世話が助かる尿垂れの
のほ、んじや (大尾)
讀捨にして里の状も
讓らぬ果報が子に有て

花 弄 園 春 雄 撰

千事に心を (秀逸)
砂糖に塩 (第二)
癖に成 (第三)
下が見憎ひ肥た眼は
味が身に染辛ひ世の
爰迄來るとけつまづく
燐寸の職場へ往く繼子
入らぬ物買ふ聞合
新荷で迫る馴染先

十八
壽 魚 雀
一 司

竹 全 林 夕 頼 戎 竹 駒
升 キ

冠 附 獨 案 內

尻から烟り
いろく (拾軸)
兼ての約束 (大尾)
誰レヒや挽売てんごして
梅カチ落す里の母
二十年と滿九年に成リヤ

應 亭 八 樹 門 撰

稀な事 (秀逸)
注文通り (第二)
似たかよつたか (第三)
痒所へ手
唐物町の孫呼で
張らぬ明家で貸家札
最ふ牛の聲
學識も有り雄辨で
梅の小紋を巾く後へ

十 浦 島

東 山
辰 己
松 山
山 人
半 月
よ 若
桃 花
湖 石

冠 附 獨 案 内

似よつたかたか
稀よつたかな事(拾軸)
雲霞(大尺)
盲龜(秀逸)の浮木(第二)
苦(第二)が味(第三)じ
笑(第三)をふくみ
賤心道
軒端(第三)に蔦
玉子(第三)も切(第三)椀
笑(第三)ふくみ
塵(第三)の浮世

龜 遊 亭 萬 壽 撰

毬あ蹴あわからん宿屋下駄
粽あ配ありも拾あ着あて
櫛あ窓あ明ある長談話
濱あでの出世手本には
婆あさん聞あんせマア得あと
お仕舞あお爛あ仕あてお升
暑あサは忘あれ安あスひの
竹屑あの出る繩あのふて
悴あどないじや誘あひ状あは
春あの構あじや窓あ際あに
せわしい一ツ寄あのんか

立 半 月
八 山 人
八 竹 人
大 八 木
岡 丸
辰 己

冠 附 獨 案 内

名残(拾軸)を惜(拾軸)み
結構(大尾)
念力(大尾)通(大尾)し
麗(秀逸)わしい
道(第二)致(第二)へ
雅人(第三)の寄合(第三)
あらかく
勢(第三)ひ
麗(第三)わしい
曆(第三)見(第三)て
勢(第三)ひ

峰 月 葦 俄 山 撰

其あ癪あ早あふ眼あは明あが
梯子あへ寐あさす日あが暖あて
木あの香あ移あして搗あ餅あに
千代八千代とも祝あされて
席あも隔あて七あ才あから
互あひに虎あの尿あ踏あで
手あ製あで呑あで百あ薬あも
笠あで埋あて神あの地あは
茅あが出あ揃あて苗あ代あも
船あ頭あ持あ餅あ詠あへに
蜻蛉あも廣あふ羽あを伸あして

山 人
八 木
大 丸
岡 己
竹 人
ユ キ
芳 若
梅 々
木 三
山 ム
正 九

冠 附 獨 案 内

本間もん
神鏡に寫し (拾軸)
麗わしい (大尾)

井筒軒御重撰

散ル (秀逸)
天狗 (第二)
辛ッ苦 (第三)
世話いらす
念おして
かつと任せ
ヤキモチと
捨る

宿下りにはお局も
ろふで無ひにも笑顔して
老せぬ詠ア、實にも
ツイ格子の間の破から
産着も羽織着る方で
杉へ泊ろで小天狗も
鳥の羽根がぬれるので
田樂取も直の知れた
春は伊勢路の掛取も
義務には身物滅て迄
極意は爰と可愛子の

蝶子
タカ
三雀
芦水
三樹
いろは
可山○
芦水
玉源
ト

冠 附 獨 案 内

さらいやの
兼帯 (拾軸)
つかへテル (大尾)

智十亭一司撰

忽チに (秀逸)
嬉しい (第二)
叶ふた望 (第三)
自由の權
すつばりと
門番
癖しい
獨立

墨摺ッテ、も此箆管
櫛持ッ間さへ店へ手が
書さへ見る間が新聞の
社から寫すと幾燭も
七日我子を尊敬して
家賃すくく場所柄の
酔も出んケド本家では
落子一鉢摺抽して
蜜峰にさへ役くが
喜代が半盞押し付て
糸に乗らいで貴公の聲

辻一
玉一
クモ
竹木
八木
命木
八木
春木
よし若
山人
八木

しやつきりと
全 (拾軸)
一さん走り (大尾)
種蒔て無ひ權兵衛で
禮義Eすも椅子退て
竿でかわして岩はなを
矢 珍々
東 山
芳 若
角 木
八 世
入 摩

桂之家輝文撰

紀の國大和 (秀逸)
會釋仕合ふて火の見から
門どの女中も這入らんせ
裸で道中なつたのも
保津で船もかり切に
尿も見物高ひ地で
今に類なし雷りの
ムクく咄し聞たかて
毛虱がわかん此方の嫌
達 命 歌 浮 入 角 芳 東
摩 世 木 若 山

吞込で
忽 子 (拾軸)
念 (大尾)
虎子へころり批把の種
先生に掛り死たけりや
大阪の喧嘩とやすたら
八 木
角
ラン
プ

放心亭不格撰

順氣よし (秀逸)
餅も減る方でドカくと
所替ば (第二)
章魚とは可笑婚禮に
委細は胸
張る乳かへた嫁連て
順氣よし
覚の息も早ヨ止て
所替ば
假名の考にや電報の
引張合
師の走る頃人の手も
チレブンカ
凝かまつた手の外は
委細は胸に
チホ、あんたに問ひテエな
爲 九
森 一
村 六
又 司
壽 六
一 升
又 六
全

冠 附 獨 案 內

千に一ツ
ウント結り (拾軸)
禮義正しく (大尾)

娘出し所御幸道へ
飴屋も字には筆貸して
根松は夫婦後家所も

二十八

嫌又六
壽司

面白亭玉蘭撰

最一汗 (秀逸)
委細は胸に (第二)
最ふ一汗 (第三)
理に當り
珍文漢
ウント結り
順氣よし
禮儀正しく

飛龍も劣る勢いで
勤功は口で譽ぬけど
眞の文明世界へは
不思議が滅つた世の中に
八目所か見て居ても
當世慈愛に老の身も
莖の論なし長家にも
更ナリヤ亂る、席じやケド

爲芳又六
空信又六
イ空夫六
又六
双馬

冠 附 獨 案 內

引張合
珍文漢 (拾軸)
ウント結り (大尾)

樓主の徳じやつとまりは
愛仕りや語り升ケレド
山も官地になつてから

才司
空北
三光

東薰舎梅一撰

海外旅行 (秀逸)
運動して (第二)
苦にもせず (第三)
氣を付て
旅の空
海外旅行
苦にもせず
氣を付て

種を拾ひに國益の
睡へ落した紅衣裂も
身を削く貧も工風中は
寐酒慎む醫者の車夫
官費貰ての結構さも
名有る古物も利欲から
衣の肩は抜てるに
壯士の舉動平服て

東山
指輪
よし若
信夫
不醉
半月
指輪
半月

二十九

冠 附 獨 案 內

電氣燈
氣を附て(拾軸)
月清し(大尾)

朗 延 齋 竹 人 撰

勇しい(秀逸)
意(外)(第二)
いつかな動ぬ(第三)
衣服改
いつかな動ぬ
衣服改
一時遊(のま)
命の洗濯

ホヤ職の手間下つたも
蔭から店の育ッ椽に
詩吟の聲が甲板に
見返もせず海岸を
歸朝仕たのも眞珠採
髪に緊レて細君の
茶蟲も卯の露吸ひに
往た道戻る折提て
都の春はこき交て
五厘張込車屋も
儘ならぬ事言ひ合ふて

達 不 達
磨 醉 磨
竹 半 月
歌 春 歌 半 月
松 歌 春 歌 半 月
カ ナ ル

冠 附 獨 案 內

いつかな動ぬ
溢も湯氣立(拾軸)
今が最中(大尾)

瀧 之 家 流 水 撰

榮 (秀逸)
見ず知らず(第二)
濁なし(第三)
家敷を廣
見所多し
賑ふ夏
見す知らず
臨時の用

恥じて家主の清盛も
垂が長なる引上の
濁り水打田樂屋
職の勉強も額に仕て
體堅して抱レても
お樂が知れる行水で
閑静も欠る虫所の
違て挿畫の新紙とは
何所の神主も藏入て
番號にしろく乗仕なに
交てて保護若中へ

半 月
同 木
八 木
の 十
タ カ
竹
鱗
達 鱗
辻 一
蟹

日本魂
何ともなし (拾軸)
濁なし (大尾)

春風亭系遊撰

追従たらしく (秀逸)
一樹の蔭 (第二)
追従たらしく (第三)
百貫形
袋に猫
追従たらしく
西洋習
全

子供の世話は小林の
お茶濁るかど案じたに
雨後の水にも衛生から
蔭では以前しろしつても
足らん言葉に意も出来て
間夫に素氣無ひ奴じやケド
似顔を便り氣細ふに
荷の重ひ身は力ム場も
向には余る乳じやケド
改長熱心歸朝後は
頭巾御隠居引出しに

一貫
竹七
呑口
みどり
全此
三蝶
頼升
空北

百貫形
一樹の蔭 (拾軸)
西洋習 (大尾)

清花園貴水撰

波濤万里 (秀逸)
渴ても盗泉 (第二)
類よけて (第三)
つくと
蠟燭
蘭麝の香り
つくと
麒麟も老て

見て呉首の昇龍を
思もや枯せん碑の花は
店より派手な廣告も
種を拾ひに國益の
言葉鏘ラす綴着て
友が大事と子の所作に
氣附て雪の下萌に
祝ふて豆を取る物の
窓へ眼が附く茶の客も
振り放された手を組で
糸切った齒に糸が入る

三蝶
中九
爲九
東九
魚九
此九
文九
八九
八木
の徳
呑口
氣位

冠 附 獨 案 内

やけすこ
忘る、隙も (拾軸)
開く (大尾)

長松亭鶴住撰

埒も無ひ (秀逸)
鬘斗は心に (第二)
ちらいらん (第三)
賣物に花
焚豆に花
宮本無三四
埒も無ひ
櫻子らく

春虫海老喰て親の日に
氷る鐘にも夜牙して
南枝は積る中からも
盛に成つては何事も
姉公袋おせんじ用も
撰子が調や店先で
箔は薬味の外じやケト
洋食瘦に見違へた
書林の主人作を仕て
柴仕る耳にや聞わいて
谷は戸明の頃にまだ

嫌
此
東山
東三
士口
里
竹
里
梅
流
東三
笑
水

冠 附 獨 案 内

瓢箪に鯨 (大尾)
恨みなし (拾軸)
額は晒落木 (大尾)

柴之門笑山撰

仕方立 (秀逸)
最ふよいし (第二)
七人の敵 (第三)
仕方立
知た顔
時は今
江戸の敵
空蟬

出てる子の眼にや町の方が
葱は夏の興でお升
押せば明線な閑して

一ッ心になる二人
這出の給仕二度目に
三日目迄は勝たけど
お家の跟す見る出入
秋も最中と梢へにも
白の目立に出る石工
筆の毛先も嚙み切て
鶏卵商が使用荷造に

升
新
丈
辰
己
此
明
山
人
此
輝
十
半
月

冠 附 獨 案 内

扱ても見事
言分なし (大尾)
市俄高へ出ろか嫌の尻
電燈の消ゆる千秋樂
試堀にまさる準益に

千 洗 堂 光 々 撰

千代の春 (秀逸)
流替り (第二)
よくくの事 (第三)
長イ
ヤレく
流替り
親密に
工風して
鶴も一割年寄つた
二人乗とは自轉車の
主人打ひて武藏坊も
帽子出製で福祿壽
チキチンくコンく
かはよに帽子改を
七福神と金満家を
焰魔亡者で饑釣に

上木
八木
同
芳若
カナル
一里
一升
正札
七二
七二
○ 遠
○ 廣

冠 附 獨 案 内

主義擴張
忘る年 (拾軸)
同 (大尾)
取殺迄出る幽靈
琵琶を弾して六神が
僕も九鬼氏の深切に

鶯 花 園 春 好 撰

長閑麗 (秀逸)
帆八合 (第二)
千金 (第三)
震
長閑麗
離レく
千金く
長閑麗
皺の手も有る若菜摘
舞ふより嬢に庭舞せ
二人チンく鴨の鍋
逢ふた人にも春の情が
谷渡ッてる音も聞て
別荘の間敷雅に建て
落葉ばやいた今朝庭も
塗下駄で踏牛の尿

正札
よし若
一里
二葉
辰己
二葉
松京

冠 附 獨 案 内

今に至て
うわの空(拾軸)
細道通り(大尾)

酒好舎狸々撰

下手が寄合ましたやら
巻筆職も管見ると
柴の戸へ来る瀧の水

風

ケアケレレツ(秀逸)
五木塙に鶴(第二)
向ひ同士(第三)
末の末迄
殺風景
夢うつ、
エレキノカッ
目立進歩

腹に有るのか吸石が
長家での書記車夫の子が
エ、もん山の掛合は
湯口へ當る器械なら
音頭に諷た城ジャけど
酒と言ふ世の曲者に
夢さへ通ひ兼たのに
時計の針も世帯仕りや

一笑同胡六茶玉一

蝶 一滴

冠 附 獨 案 内

五木塙に鶴
廣(拾軸)
埒も無(大尾)

花樹軒芳若撰

先生の身上（こも）拵（たご）か
草鞋も賣る京道（けい）に
紅葉も何の己（おの）でば

八魚玉 一木

積る咄(秀逸)
罪なし(第二)
隠れん坊(第三)
大切(大)
立身出世
大相(いり)エ(い)ン
徳な人

寫眞も出して英佛の
和尚より子僧が有難い
木挽の煙管チガ屑で
四五本の燐寸山道で
數年古びた鈍な書が
樺の腦も入(い)て遺墨(い)には
樵夫も斧を肩(かた)にして
閑居の道も草はへぬ

百月中 花月 達广 正札 此キ 梅夫 天丸

冠 附 獨 案 內

大 切 に
無 理 は な い
立 身 出 世

達 廣 弁 芦 舟 撰

慈 役 人 の 脈 も 見 て
貫 て 吞 乳 の ひ つ こ い も
谷 間 に 有 れ ば 艸 じ や の に

四 十

達 林 廣
夕 林 夕
キ

づ ぼ ら 主 義
是 が 肉
橋 の か は り
出 立 用 意
擱 合 い
偵 男
渡 旅 戻 り

借 金 踏 ん で 韻 字 よ り
出 て 行 と 戸 を 明 る 母
紙 帳 に 艶 書 が 尼 寺 の
禪 を す る 湯 治 客
相 ひ 基 は 先 を 争 ふ て
角 力 取 し て る 紙 雛 に
警 女 の 手 引 で 入 橋 を
風 呂 屋 で 草 鞋 解 く 鯉

歌 田 琴 利 琴 田 歌
樂 舍 橋 久 橋 舍 樂
夫 曲 夫 久 橋 舍 樂

冠 附 獨 案 內

擱 合 い
落 つ く 尻
風 ぞ ろ ぐ

森 盛 堂 木 三 撰

下 女 が 眞 綿 と 山 出 し の
持 参 の 金 の 封 が 切 て
宗 論 も 聞 く 木 賃 宿

九 〇
指 輪
モ ロ ミ

出 所 よ し
ポ イ ト 飛
父 は 長 柄 の
代 理
出 所 よ し
織 物 入
音 鳴 物 入

廣 告 利 益 電 氣 燈 の
手 か ら 螢 が 寐 て る 子 の
譽 り や 來 よ つ た 席 借 に
乳 貫 が 吹 釜 の 下
帳 場 の 書 記 も 仕 車 夫 で
戎 橋 す じ 日 當 り も
幼 兒 押 て 來 て 煙 艸 登
東 風 吹 頃 は 蓮 池 も

達 信 達 信 達
廣 夫 廣 夫 廣 夫
臺 東 亂 四 月 達 信 達
光 山 夫 季 廣 夫 廣

四 十 一

冠 附 獨 案 内

代理
天道人(拾軸)
カ(大尾)

デモ附キでへな來てるケド
売入梅雨の多ひ年は
歟入ぬ地は北海道

一 達 貫
亂 夫 磨

金 鶴 亭 壽 司 撰

耻入て(秀逸)
うし(第二)
か(第三)
後の樂
渡り船
外を尋
か(第三)
耻入て

粗製減して輸出の
下女によし此教たり
栗の飯喰て賤ヶ家の
親も學費はつらいケド
長良も逢て黄石公に
無雅は名所や古跡より
氣附は愛か禍イと
妾と言われ子心に

一 ① 東 桂 芦 信 九 東
貫 夫

冠 附 獨 案 内

後の樂み
眼の正月(拾軸)
足らん勝(大尾)

まめに動も重ひ身を
嫌身受して伏見から
結句氣樂じや夜も寐よて

正 信 彌
九 夫 笑

松 之 家 旭 撰

雨催(秀逸)
耻入て(第二)
繼くちや(第三)
櫻に虎
か(第三)
見物がたら
わつさりと
繼くちや

雪車が重たいうわ解て
行義見習て小姑も
先生紙衣は雅が洒落か
際な屋茶屋の臺所に
垢が緩てる一首にも
湯の功能はともかくも
つれく剛もよろしクド
池の漣み月影を

一 正 壽 芦 一 叶 信 東
七 札 司 七 夫 山

冠 附 獨 案 内

眼の正月
意氣地立ち(拾軸)
足らん勝(大尾)

求 樂 庵 正 一 撰

冥加至極(秀逸)
何にも知らず(第二)
適の御越(第三)
門徒と法華
陣取り定め
延 氣
積る塵
脇目も振らず

位階も拜領民の身で
連が靴買や靴買と
國子仕るやら機下りて
口では氣配問ひ合て
幟は愛へ唐團扇も
熱海伊香保と辭職後は
いよく始末面白ひ
願仕業に身が入て

東 山 恪 一 裕 正 龜 一
山 ル 貫 子 札 遊 聲

壽 司 龜 遊 東 三

冠 附 獨 案 内

憎てらし
類も應ず(拾軸)
はつといて(大尾)

豐 兆 庵 里 雪 撰

十日の菊(秀逸)
浮世は夢(第二)
抽出て(第三)
賑ふ秋
豫防して
無學文盲
反り返り
戸輕ふに

鍋が着せたい此方の人
腕に覺への勉強者は
手酌で呑ふゆつくりと
何時つ買ふたやら寒紅も
何日は吊ふ我身シャが
我が悪に成て嫁
村へ盈るゝ大根
蕾は奥の間に活て
折々熱茶あふせられ
具上の月を見る猪首
笑われてからお結も

北 丸 夕 辰 己 同 二 小 達 磨
九 力 己 曲 柳 磨

禪ぜん 靜じやう 追おひ 静じやう 禪ぜん
カカ (拾軸)
とと (大尾)

夜よ 這ひ スス 狂きやう 道みち
仕し 形かたち で 悟さと る 狂きやう 言げん は
涎よだめ く り よ る 鼻はな 垂たれ も

四十六
鹿 一 辰 己
滴 入

室之家白棋撰

無學文盲(秀逸) 抽ひ 出だ て(第二) 揮ふる 出だ て(第三) 手輕ふに 無學文盲 抽ひ 出だ て 明あ カカ 現げん 金きん

石いし 抛な り や 散ち す 我われ が 毛け を
目め 立た 源げん 太た が 只ただ 一ひと 騎き
三さん 韓かん 征せい た 御お 心こころ は
蚤せう の が 動うご す 關せき の 尻しり
薄うす 茶ちや よ ば れ て 泡う 吹ふ た
外ぐわい の 音おん 奪だつ ふ 轡くわ 虫むし
二に 世せ の 夫おとこ に 變か る 袈け 袿き
茗めい 荷か 好こう で は 割わり 前まへ も

湖 八 同 吉 染 八 宮
月 木 野 木 滴
一 八 宮

手輕ふに 靜じやう 禪ぜん
(拾軸)
(大尾)

摺すり 鉢はち で 味あじ 附つ 喃なん だ
地ち も 雅みやび に 足た 足た て 鳳凰堂ほうおうどう の
轉くる ろ と 思おも ひ な は る なら

梅 半 盃
月 々

和風茶梅々撰

追おひ 出だ て(第二) 抽ひ 出だ て(第三) 一ひと 生せい の 德とく 抽ひ 出だ て 無學文盲 靜じやう 並なら んで る

纒ゆづり 二 人 の 一ひと 致ち 一ひと から
言い わ す 語ことば す 苦く に 孝こう 女にょ
骨ほね が 折よ 折よ れ る し 賣う 花はな に
世よ を 憂うれ と せ ぬ 風雅ふうみやび 人ひと
體たい も 揃そろ てる 近衛このゑ 兵へい は
薄うす し 心こころ の 樂たの み も
浮う 世よ の 醉よめ も 醒さ る 地ち で
翁おきな は 杖つゑ も 突つ 拊ぶ て

一 辰 帶 琴 半 操 染 辰
滴 己 刀 月 月 己 己
一 辰 帶 琴 半 操 染 辰

冠 附 獨 案 內

禪ぜん 智ち 靜せい
惠ゑ 競きやう カ
叡えい (拾軸)
尾び (大)

ふらついで居ん
悴せがれ 迄
美み 術じゆつ 慕ぼ て世
界かい 中ちゆう の
總そう にろよぐ而已
浪なみ 風かぜ も

半 月
里 風
此

清 芬 齋 巖 水 撰

遙はる 三 番 叡えい (第二)
人 氣 寄よ (第三)
工 風
の は、ん
明あきら て嬉うれ しき
同 勞ろう した功こう

心が嬉うれ しわらびより
あつさり呵あは れる親おや 方なた も
正ただ 午ん からしんと仕つか る長なが 家や
許ゆる ッて客きやく の經けい 濟さい も
何なに に仕つか るものふ用もち は助たす けて
急いそ ぎに添そへ 物もの 買かひ 足た して
無な 事じ 丈だけ 讀よ りてお升しやう ので
世よ 帯たい 細こま ひ雇やこ 人ひと の

百 月 表 万 直 山 森 万
中 才 才 才 才 才 才 才

冠 附 獨 案 內

三 番 叡えい (拾軸)
指さし 南なん 受う (大尾)
一 番 派 手 手 に

其 日 庵 無 事 門 撰

早はや 付つ けとんか船せん 頭で さん
嫁よめ は分わ かつて有あ る事こと も
玄げん 關かん は振ふ りも曲まが 附つ けて

赤 楊 枝
玄 々

うかくと (秀逸)
影かげ て吉きち 相さう (第二)
我われ 人ひと 爲ため (第三)
願ねが 成なり 就しゆ
迎むか 送おく
笑わら ふ門かど には
うかくと
送

元もと へ戻かへ せん唾つば ヒヤの
國くに の戸こ 籍せき も主しゆ 人ひと から
不ふ 便べん な場ば 所しよ へ新しん 道だう も
揃そろ ふ御ご 無む 事じ へ着き 銚しやう ッて
捨す ず 舊きう 主しゆ の零れ 落らく に
客きやく 絶た がせんいつ往い ても
我われ 身み に抱だ いて見み る迄まで は
都みやこ 會かい へ籍せき も遂つい 九 身み は

爲 森 文 魚 光 ス 花 氣 助
丸 明 九 一 儘 助

冠 附 獨 案 內

罪は眼の前
ウシ共スシ共 (拾軸)
四季の詠 (大尾)

深 艸 葦 吳 竹 撰

野となれ山 (秀逸)
寸の蟲にも (第二)
誰にでも (第三)
町噂に
しん底から
袴
待甲斐有て
脱ギ捨て

誰しい鬼が帳持った
風吹かばでも讀み嫌いで
雅味の深ひも張交に
問ひ合ふてころ義務じやのに
家賃出してりやナアお嬢
惚るし今の物が有りや
恥し入破傘貸して
薄ひ蒲團の寐心は
足も厭ふてかんざしの
邪魔仕た奴が仕業場の
草鞋も慈悲の裏口へ

光 森 樂

猪 口 光 伊 此 平田 此 平田 村

冠 附 獨 案 內

三味線彈 (拾軸)
集
人見て法 (大尾)

萬 平 軒 爲 丸 撰

關係なし (秀逸)
丸で芝居 (第二)
元も粉も (第三)
迎なら
万里同風
二度無事
万里同風
神は正直

後家も調子が狂てから
軒に早から吳服屋の
うつかかり言エんお茶漬も
何に成るのじや寒餅は
静か借衣装忠信で
箔屋家内中風邪から
腹へ入レ處見たら罪
男は男嫌は嫌
能程嬉しナ、嬉し
西へ散る日は西へ散る
粟を蒔手は濡てない

吞 口 光 燦

村 みどり 二 曲 茶 甫 茶 甫 二 曲 茶 甫 二 曲 豆

冠 附 獨 案 內

眞の道(拾軸) 今の處迄寄留して
 元も粉も(大尾) テン屋母者人買てんか
 松之家緑撰
 つくく(秀逸) 寐ながら翌の段取を
 三日坊主(第二) 遊でるケドぶつけ合て
 渴ても盗泉(第三) 嫌耻ヒメて居よるひ
 忘る、隙も 名譽得たさの氣の張に
 賽翁馬 からびた筆で賣家も
 噛よつた 嫌らい筆等へ無理仕たら
 闇夜月 非も理に受て姑メの
 ヤケスコ 駕の中にも八巻で
 香 爲 正 下 辰 氣 爲 東
 口 札 樂 己 儘 山

冠 附 獨 案 內

類よけて 竹植て無ひ先生所
 寸善尺魔(拾軸) 荷はマア後の事にして
 結局(大尾) 福を落しに參るのじや
 世は(秀逸) 豫算も余る監獄の
 澤山(第二) 幼兒早爰へ鎌持て
 治に乱忘れ(第三) 物入にして非常籠
 中途から 目出度ひ喜代でお暇を
 芦も濱萩 這出の言葉笑ふけど
 船も居踞 石炭焚も寐て仕舞て
 鼻尿程 疑は多ひけど月給は
 澤山に 今 は 櫻も名所も
 正 直 鬼 直 正
 札 卜 樂 卜 札
 同 里 正 札

鶯遊軒梅林撰

冠 附 獨 案 內

踏む 瘦る (拾軸)
笑を 殘し (大尾)

夜這 恟り 洋犬の尾を
扱ケテ 指輪も 病戀に
日裏へ 延た 方の 枝は

八木 達磨 浮世

五十四

寄合 (秀逸)
惚く (第二)
追く (第三)
同 是非に及ぬ

眞の 懇意は 自費遣つて
人を 照らさん 交際家
金の 剛砂 迄流 込
驥の 手で 早撫にや
おしい 色葉の 散ぬるも
宿屋 頼んで 賣る 指輪
爰から 森と 仕る 雪も
肴にも 鮎土産にも

此半 辰己 古木 春此 此風

冠 附 獨 案 內

大入 追く (拾軸)
廻狀 巡し (大尾)

取次で 出す 渡り 錢
高ひ 器械も 安遣つて
雅は 三里にも 初もの、

三雀 命月 半

現 金 亭 正 札 撰

疝癩 起し (秀逸)
莞爾 (第二)
退屈 (第三)
魁爾

聳も 媒人の 尻ながに
請て の 歸朝 一等 賞を
甘露 の 雨も 瀧茶 屋は
疊屋 へ 來る 二人、 連
甘ろ な 柿を 鴉め が
貯金の 通ひ 針さし へ
供は 小聲で 虫さし の
東京の 客にや 手鹽皿

歌水 流人 山夫 信升 芳若 紅木 八木

五十五

冠 附 獨 案 內

肩替かたかて
疥癩せいか起し(拾軸)
情なさけ知らず(大尾)

丁ちやう稚ちの寐ね問まへ這はふ番ばん頭こ
鰥やまも朝あさ困こまつてる
媽ははは肝きま入いり薄うす四よ屋えの

達たつ命いのち磨こ
信のぶ夫つま

氣 養 齋 花 笑 撰

一いちばん(第二)
梅うめに雀すずめ(第三)
安やすひ事こと
音ねが仕つかる
花はなも實みも有あり
延ひ氣き

輸お出しるも國くにの耻はじ思おもや
先ま言ことエまして味あじが
名なは囉わふても姉あねはんの
見みへぬ店みせじやが競あそ争まとも
白しろむ軒のき端はに突つ羽は子の
ナホ、膝ひざ迄までヒイキに
適あたにや客きやくにも異い見けんして
喜よろこ代しろも組くみ重おものあれん日は

東あづまの三さん
新あらたの九く
叶かなのし
連つらの鶴つる
龜かめの松まつ
小こ松まつ

冠 附 獨 案 內

明あき廣ひろク
安やすひ事こと(拾軸)
音ねが仕つかる(大尾)

熾さか落おますし仙人せんじんが
御ご入い遊あそせ通とほふより
今け朝あさにのんどり野の川がにも

青あお霞かすみ鬼おに
霞かすみ東あづま玉たま

光 鱗 亭 魚 一 撰

年とし代しろ記き(秀逸)
御ご機き嫌きらで(第二)
明あき白しろ(第三)
陽やう氣きな事こと
同どう
今けじやく
低ひひ調てう子し
邪じや魔まが入いり

松まつ茸たけのこ見みせて虫むし喰くの
古ふる傘かさ出ですと雨あめも止やま
見みせて埃ほこの尻しの穴あな
杵きねが杵きねなら的あて的あて
和わ尙じやうが引ひ導だうで朱しゆの信しん女によ
音ねがせわしい鈴すずの輪わの
小こ間まに弾ひく音ねは春はる雨あめの
川がの字じに成なる又また元もとの

北きた表あは九く
居い司し
表あは目め
表あはモロ
月つき
同どう

冠 附 獨 案 內

陽氣な事
低ひ調子(拾軸)
今じやく(大尾)

九重葎一都撰

墨玉(秀逸)
同(第二)
義務つくし(第三)
西へ傾き
相入次第
むつかしい
直接關係
堅い

的貸せく
放座敷の忍ぶ夜は
鏝る鏝は吉助の
褒賞の沙汰が上野から
八日に見たら日曜掛
師の子を弟子が弟子にして
ラム子殿瀧の茶屋
袖の花おちも一役で
進む美術に詩畫師が
局にも嫌ふ雷りば
裏に入る斗り飲酒も

辰九半辰
辰九正己
辰九正己
辰九正己

北楊枝
北楊枝
北楊枝
北楊枝

冠 附 獨 案 內

益ない事
むつかしい(拾軸)
堅い(大尾)

春之家花玉撰

中々(秀逸)
埒明ぬ(第二)
待り限知(第三)
見解異に
好結果
運え動
世に隨ひ

蟻に道を問ふ蟻
待夜の案じ無かほり
直に我家へ倶楽部出て

吹雪拂ふて居酒屋で
弟に委任仕るとせにや
役割仕たり根き見て
帽は心に低ふ着て
とふ成る説も買上て
市も賑ふて年末の
問屋の無理に職方も
さむの落葉が別荘に

三山人樹
山人樹
山人樹
山人樹

東山
柴重
千鳥
×
ム
五
柴行

冠 附 獨 案 内

運 動
天保主義 (拾軸)
豫防 (大尾)

柴之家互友撰

嘘 (秀逸)
曇りなし (第二)
曇りなし (第三)
周章者
知らんが佛
曇りなし
曇りなし
氣に入ッて

舌にやころ懸取が
笑つて仕舞たら男氣が
乳母も年寄うか
高給も捨て合ぬ意にと
下駄も向齒が早減ッて
船長の心痛今朝開ッて
嫁娘に細ひ職さして
嫁でなくばと何事も

消化の早ひパンヒヤケド
延掉の日は花街にも
救済金も下附成て

×竹雀

東正三
角九
×よし若
角長
○

冠 附 獨 案 内

さま見され
後の爲 (拾軸)
曇りなし (大尾)

森仙居信夫撰

勞した功 (秀逸)
立ッた思惑 (第二)
ひいわりと (第三)
ちく一調べ
勞した功
至當の斗ひ
氣儘暮し
世の中よし

貴わだ練とる生意氣が
讀どき遊びたい時に
白井越す日も雅が薄ひ

角一
歌無

世者轉々いと裾踏で
漢書を賣つて洋行費に
鳥渡痛ひ處いらわれて
不思議の地所も維新から
洋宿の修行も夢に見て
上下一附た捌きとは
室は不潔な下宿屋の
酒樽積で遣ぬ牛も

松山
達磨
扇
柴戀
柴半
達磨
月

立ッた思感
社に入る友 (拾軸)
ひいわりと (大尾)

鶯 笠 庵 羅 紅 撰

改 ヲ (秀逸)
あしろふて (第二)
争ふて (第三)
アリくど
案内して
伺らしい
阿印

外に土産は無ひ替り
人の愛子と遣ふにも
後でも買へる切符じやに
参る心が神の扉へ
今日は車屋ぼろい客
恨でるろな後で開や
獨メろな鮎二三正
初篇に出てる若殿は

角 扇 玄 々

松 日 桃 大 櫻 魚 光 月
山 の 花 黒 九 丸 〇

味ふて (拾軸)
難有ひ (大尾)
足は千鳥

春 筮 亭 筆 一 撰

一身に一向 (秀逸)
ケン呑く (第二)
さつう答へ (第三)
安心く
組合し
ケン呑く
ちうくど
笑をふくみ

猪口持したら呑人の子
貴族の椅子に平民も
皆落すなよ御祝儀を

命 信 松 山 夫

運ふか運どいで讀で
這ふ子の傍に置く洋燈
數は少無ひ言葉じやが
憲ても堅ひ杖有ッて
手際な障子書院の
神の加護ある氷でも
まだ北窓は堅ひタド
教師も足らぬ賞品に

山 二 竹 正 月 小 市 歌
貞 三 札 一 円

冠 附 獨 案 內

ウント承知
愛見九か (拾軸)
一身に一向 (大尾)

葱

堂戀一撰

冥加至極 (秀逸)
勝目もふらす (第二)
問わんせ (第三)
憎てらし
適の御越し
はつといて
貧
積る塵

位階も拜領民の身に
三厘の酢のお使が
分らん事は説明者に
入らんわんたの首筋に
美術好で魯皇子が
急く仕業じやに世話好が
書家に名高ひ人じやケド
印紙も反古に仕舞た

東山 龜遊 一貫 夕山 東山 同山 市丸

此信市 丸夫

冠 附 獨 案 內

何にも知らず
延氣 (拾軸)
知るべに立寄 (大尾)

豐壽葦悟樂撰

悦び (秀逸)
餅は餅屋 (第二)
力入れて (第三)
日和窺
治に乱忘
中途から
菴住居
山々咄し

花は望の地に咲いて
覗貝迄泥くさい
房もつれろな見臺の
お結仕るの迷てます
貰た義捐で鯛買ふて
手引連てる工合では
曾我家の紋の木爪は
洋行祝した友も来て

正札 芳若 九正 春月 半月 三八 八木 芳若

うんてれがん
風の便り(拾軸)
悟ル(大尾)

悟空庵無物撰

晒舞ふとる
縫ふ氣に成らん
散る木の葉見て座禪堂で

正札
達磨
松山

は花に
腹賣て(第三)
はし(秀逸)
は(第二)
は(第一)
は(第一)

官立らず得た卒業證が
正午が開けて縮物屋
珠數入してよるかしわやも
錦の帯は五すじに
子が躍の面白ひに
今紫が東京から
今紫が東京から
今紫が東京から

此九
割竹
割竹
此九
割竹

腹賣て
春や昔し(拾軸)
晴渡し(大尾)

長壽菴速齋撰

書出し別
枯葉が交る柳に
水崗ませす銀河に

好遊
割竹
此

痛し痒し(秀逸)
遠て近ひ(第二)
理の當然(第三)
力入レ
述て近ひ
同
下手の長談儀
途附て

出さには病が出しや虫が
したる露は雲井から
舞子の割は出す
鐵棒も請る長刀で
書割り
通はぬ夢も開化から
興が無ひ庭へ來てるケド
拾子群集の黒縹子へ

此達磨
九達己
九達己
九松
九松
九松

冠 附 獨 案 內

遠て近ひ
カヲ入レ
(拾軸)
(大尾)

蔭の惠も紙上へ出て
金箱の木の地磨にも
議士は民の荷輕かれて

此 カチル

作明 冠 吟 獨 案 內 終

作明 冠 吟 獨 案 內 附 錄

風 律 齋 芦 笛
四 海 浪 靜 丸
陰 陽 軒 和 合
梅 之 家 春 睦
富 貴 館 長 命
鷹 之 家 東 雅
旭 居 鶴 翁
竹 養 亭 虎 勢
淺 茅 庵 羅 山

(西區京町堀兩國橋北詰東側)
(東區本町橋西詰西側)
(東區博勞町三休橋西側)
(南區長堀中橋北詰西側)
(西區橋通瓶橋西側)
(東區備后町中橋西側)
(上鹽町地藏阪北側)
(西區橋通り住吉橋角)
(西區高臺橋北詰東側)
(東區本町橋西詰西側)

錄附內案獨附冠

春 清 華 遊 釣 桃 蕉 顯 木 管
窻 風 眺 々 竹 宴 風 光 火 弦
亭 堂 庵 房 舍 齋 窻 亭 土 齋
喜 里 春 回 鯛 回 双 麻 金 素
史 棋 居 賀 一 水 鶴 貫 水 閣

(東區安土町浪花橋北へ入西側)
(南區鰹谷鍛冶屋町北へ入西側)
(東區西横堀信濃橋東詰南へ入東側)
(南地 女紅場)
(上鹽町墓ノ谷南へ入東側)
(北區安治川北通安治川橋北詰一丁西へ入)
(上鹽町生玉表門筋北へ入西側)
(西區新町北通藤ノ柳觀音西へ入北側裏)
(西區堀江五橋北詰北へ入西側)
(谷町源正寺阪東拔夕裏)

錄附內案獨附冠

青 一 東 田 湊 應 花 戀 松 白
々 返 雲 每 賑 亭 弄 連 諷 貫
舍 齋 庵 庵 亭 八 園 舍 亭 堂
松 登 朗 浪 芦 樹 春 文 琴 鷹
樹 丸 朝 月 風 門 雄 一 史 丸

(東區高麗橋三休橋角)
(南區高津高津橋鐘筋東へ入北側裏)
(南區鹽町通二丁目堺筋角)
(西區西二橋南詰東へ入南側)
(東區久寶寺橋西詰南へ入西側)
(西區阿波堀川豐橋北詰東へ入南側)
(西區京町堀羽子板橋北詰西へ入北側裏)
(西區釜平橋北詰東ノ辻北へ入西側)
(南區上鹽町高津表門南へ入西側)
(同 丁)

錄附內案獨附冠

龜遊亭萬壽
顯鐘樓鬼貫
誠心亭道一
峰月庵俄山
照月庵桂山
井筒軒御重
駒之家瓢
智十軒一司
不老庵久樂
小倉庵善哉

七十二
(東區北久寶寺町派花橋北へ入西側)
(西區阿波座戸屋町太郎助橋東へ入南側)
(西區阿波座戸屋町阿波橋西へ入北側)
(東區糸屋町善安筋東へ入南側)
(西區願教寺前南へ入東側)
(南區中橋三ッ寺筋東へ入北側)
(北區古川橋北詰西へ入北側)
(東區松屋町内平野町南へ入西側)
(東區内平野町御拔筋北へ入東側)
(南區内安堂寺町二丁目善安筋西へ入)

錄附內案獨附冠

長齡堂松花
朝望亭一山
桂之家輝文
放心亭不格
麓蒼齋都水
福之家德齋
面白亭玉蘭
其丈堂如鴻
可笑亭笑照
東薰舍梅一

(西區黑金橋南詰南ノ辻西へ入南側)
(東區唐物町浪花橋西へ入南側)
(北區堂島渡邊橋北詰北ノ辻東へ入北側)
(北區天神橋筋鳥居前南へ入東側)
(北區天神橋筋表門南へ入西側)
(北區天滿九丁目魚ノ棚角)
(北區天滿市場)
(北區天滿市場)
(北區堀江坂築橋南詰東へ入南側)

錄附內案獨附冠

朗延齋竹人
延壽堂賞翠
瀧之家流
春風亭糸遊
富士の家二鷹
登雲齋龍水
清花園貴水
都瓦亭鬼笑
松之家墨江
雪光舍富士

七十四
(西區花屋橋一丁北ノ辻東へ入南側)
(東區本町橋西詰西へ入北側)
(南區松屋町末吉橋南へ入東側)
(東區今橋二休橋北へ入西側)
(北區蜷川櫻橋南詰南ノ辻東へ入南側)
(東區島町松屋町東へ入南側)
(當時神戶)
(北區天滿寺町橋東詰南へ入西側)
(攝津國住吉郡喜連村)
(攝津國住吉郡鷹合村)

錄附內案獨附冠

春芳亭花月
長松亭鶴住
一筆庵賀祝
殘家面影
玉光庵松隣
梅之家遊照
柴之門笑山
千洗堂光々
柳汀舍春翠
鶯花園春好

七十五
(大阪府下河内國丹北郡別所村)
(西區千代崎橋西詰西へ入)
(大阪府河内國)
(北區天滿十丁目魚ノ棚角)
(北區天滿天神芝居北隣リ)
(東成郡天王寺西門西ノ辻北へ一丁余)
(東區内平野町御綏筋北へ入西側)
(南區順慶町御堂筋北へ入東側)
(西區阿波堀花屋橋南詰角)
(西區願教寺前半丁西へ入南側)

錄附內案獨附冠

酒好舍狸々
花樹軒芳若
達磨庵芦舟
森盛堂木三
金鶴亭壽司
松之家旭
求樂庵正一
豐兆庵里雪
室之家白煤
和風亭梅々

(東區南久太郎町一)
丁目東へ入北側
(南區道頓堀筋黒門一)
丁半南入稻荷神社前
(南區三ツ寺筋壘屋町)
南へ入辨天邊隣表
(南區日本橋五丁目)
(南區細藏跡町字掘り)
止メ土瓶屋西隣り
(東區北久太郎町八)
百屋町北へ入西側
(東區北久寶寺町心)
齋橋北へ入東側
(南區清水町堺筋南)
へ入東側
(東區博勞町三休橋)
西へ入北側
(東區南本町浪花橋)
西へ入北側

錄附內案獨附冠

清芬齋巖水
其日庵無事門
深艸庵吳竹
萬平軒爲丸
松之家綠
鶯遊軒梅林
百的堂百中
現金亭正札
氣養齋花笑
光鱗亭魚一

(西區北堀江隆平橋)
北詰西へ入南側
(北區天神橋筋裏門)
北へ入西側
(北區天神橋筋裏門)
西へ入北側
(同) 町
(北區天滿鳴尾町櫓)
屋橋南へ入西側
(北區天滿夫婦橋北)
詰北へ入西側
(南區鱧谷心齋橋西)
へ入北側
(西區北堀江上通一)
丁目四十一番邸
(南區長堀井池濱角)
(西區江戶堀西北橋)
北詰西へ入南側

錄附內案獨附冠

長	悟	豐	葱	春	鶯	森	紫	春	九
壽	空	壽	堂	篁	笠	仙	之	之	重
庵	庵	庵	戀	亭	庵	居	家	家	庵
速	無	悟	一	筆	羅	信	互	花	一
齋	物	樂		一	紅	夫	友	玉	都

(東區南久太郎町中橋東へ入北側)
 (南區鰻谷堺筋南へ入西側裏)
 (南區高津橋筋溝ノ側南へ入申側)
 (南區なんち中筋戎橋西へ入南側裏)
 (南區御藏跡町)
 (南區高津橋鐘筋東へ入南側)
 (南區中橋三ツ寺筋北へ入西側)
 (南區日本橋筋堀リ止メ北へ入西側)
 (北區天神橋筋表門南へ入西側)
 (北區天満老松町大露路南ノ辻東へ入南側)

錄附內案獨附冠

町	新	八重霞社
錦	雷	慶
鏡	一	龜
竹	島	遊
梅	三	丸
千	秀	筋
葉	里	小
陸	鳥	光
遊	堀	堀
社	二	戸
	萬	松
	半	霞
	竹	二
	翁	社
	社	
天	堀	江
松	北	二
ト	半	社
	才	
	月	
洲	水	葉
ん	改	共
桃	良	樂
	社	社
	湖	梅
	泉	正
	島	三
	酒	房
	ン	
	ホ	
花	月	丸
		光
		樂
		笑
		三
		笑

冠 附 獨 案 內 附 錄

西 日 開 地 新 津
 靜 の 樂 南 四 勝 梅 松
 社 出 社 社 社 社 社 社
 谷 朝 石 鶴 花 京 季 光 一 山 二
 船 中 散 宮 の
 竹 石 喜 柳 平 仙 一 引 祐 鴨 初 文
 社 社 社 社 社 社 社 社 社 社 社
 翠 陽 醉 枝 人 鶴 違 子 九 山 山
 松 老 滿 天 老 江 り は 宮 場
 割 好 九 松 森 赤 布 里 可 表 川 里 一
 社 社 社 社 社 社 社 社 社 社 社
 竹 遊 曜 々 一 蝶 祝 樂 鳳 滴

八十一

冠 附 獨 案 內 附 錄

難 芦 町 上 ば
 一 原 角 三 魁 青 芳 霞 山 桂 東 松
 社 社 社 社 社 社 社 社 社 社
 貫 モ 九 樹 柳 枝 石 馬 隣
 こ さ 芦 町 上 初 地 新 波
 口 小 陽 天 二 挽 新 夢 一 龜 角 東 市
 社 社 社 社 社 社 社 社 社 社 社
 ○ 鯛 九 九 子 成 聲 遊 九 一 九
 高 雷 町 瓦 瓦 ば ん せ 平 ば
 雀 動 政 清 イ 三 平 里 光 楠 井 六 照
 社 社 社 社 社 社 社 社 社 社 社
 九 山 卜 卜 九 九 角 鶴

八十

錄附內案獨附冠

島 共 米 社 梅 薰 池 田 町 聯 合 社 天 都 常 木 夢 雪 氣 兼 錦 美 都 常 社

進 外 米 社 兼 魚 盤 九 央

滿 葉 文 長 壽 社 長 壽 社 遊 夏 琴 長 可 貓 梅 馬 九 常

明 一 亭 壽 吹 貫 足 光 八 盤

文 字

八十五 櫻 爐 芳 司 綾 一 貴 狸 月 傳 如 ○ 掉

竹 ○ 幸 九 光 昇 子 羽 木 弋

錄附內案獨附冠

流 暢 社 座 波 阿 健 友 社 堀 竹 柳 魚 大 五 新 日 浮 花 一 竹 竹 柳 魚

九 史 水 無 九 世 九 金 黑

長 玉 社 翠 社 坊 松 風 九 鷺 橫 閑 龜 燈 和 露

月 天 軒 來 風 月 人 絕 俳 香

北 陽 社 米 歲 社 崎 根 曾 堂 峯 砂 花 光 一

八十四 笑 酒 正 物 如 豐 茶 笑 酒 正 物

花 水 水 坊 醉 九 信

録附内案獨附冠

字一下
ね
き聲手

録附内案獨附冠

南 丹 伊 合
蝶 社 入 素 龍 吞 梅 春 四 琴 如 歡
政 田 入 素 龍 吞 梅 春 四 琴 如 社
九 舍 氣 直 子 洲 翁 好 丸 玉 山

丸 芦 貴 新 初 ○ 巴 八 無 友 い 源 駒
顯 十 ろ
少 一 中 月 丸 ○ 丸 茶 達 は 卜 助

十 河 小 う 小 伴 文 筆 木 林 寐 鈴 藤 八十六
口 合 巴 ぼ 林 正 丸 石 糸 言 成 本

明治廿六年三月一日印刷
明治廿六年三月五日出版

著者兼
發行者

矢島嘉平次

大阪市南區順慶町通三丁目六番邸

印刷者

吉村武右衛門

大阪市東區上難波南之町廿四番邸

大阪市南區心齋橋通り順慶町北二丁目東側

矢島誠進堂

大阪市東區備後町四丁目

梅原龜七書店

西京寺町二條上ル

梅原龜七支店

發兌
書林

